

# ヒュームとスミスの共感論<sup>1</sup>

島内明文

## 0. はじめに

十八世紀のイギリス道徳哲学においては、善悪正邪の道徳的区別の存在論的身分および動機づけの力に関する道徳認識論の領域で活発な議論が繰り広げられていたが、この議論の中心にあるのは「理性主義(rationalism)」と「感情主義(sentimentalism)」の対立である。まず、理性主義によれば、道徳的事実とでもいふべき事物の関係が客観的に存立しており、この関係を理性が認識するところに、道徳的認識が成立する。ところが、この説明では、どうして道徳的認識が我々の行為に影響を及ぼしうるのかが明確にされていない。理性主義は理論的な一貫性を保つために道徳的認識と動機づけとの必然的な結びつきを否定するか、あるいはこの結びつきを形而上学的に想定せざるをえないのである。このように理性主義の立場には、道徳の行為指導的な側面を適切な仕方では説明しえないという難点が伴なう。

こうした理性主義の問題点を回避するために感情主義の立場からは、道徳的認

---

<sup>1</sup> 本稿は、2002年9月4-5日に慶應義塾大学において開催された第13回ヒューム研究会での研究発表「共感と道徳感情——スミスとヒュームの比較検討——」に大幅な加筆、修正を加えたものである。発表に際しては、出席者の方々から非常に有益なご教示を頂いたことを記して、感謝申し上げる次第である。

識はある種の感情的反応であるがゆえに動機づけの力を持ちうるとの議論が提起される。もちろん感情主義と一口に言っても、人間本性や社会編成のうちに有機的調和を想定するシャフツベリ、ジョン・ロックの認識論を用いて「道德感覚(moral sense)」理論を仕上げたフランシス・ハチスン、「共感(sympathy)」概念に基づく道德理論を構築したデイヴィッド・ヒュームとアダム・スミス、それぞれの思想家が独自の仕方で議論を展開しており、一筋縄ではいかないところがある。しかしながら、シャフツベリに端を発する感情主義の立場が、ハチスンによって確立され、ヒュームとスミスにおいて更なる理論的發展を遂げている、ということは思想史的な共通認識となっている。本稿を通じて明らかにしたいのは、ヒュームとスミスの共感論が、ハチスンの道德感覚理論をどのような点で發展させたのか、である。

ヒュームとスミスの思想的出発点となったハチスンの主張をあらかじめ要約しておこう。ハチスンが道德感覚理論をもっとも明快に打ち出したのは、彼の初期の著作『美と徳の觀念の起源に関する研究<sup>2</sup>』においてであるが、そこでは次のような主張がなされている。まず、道德的善とは、行為のうちに把握される性質、すなわち行為者の「卓越性(perfection)」と「尊厳(dignity)」であるが、この善は我々の私的利害とは無関係である点で、利害との関連で規定される自然的善からは区別される(IBV, pp.261-263)。そして、人間の主たる行動原理は、「自愛(self-love)」と「善意(benevolence)」の二つであるが、このうちで道德的善と見なされる動機

---

<sup>2</sup> Hutcheson, Francis (1725) *An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, in British Moralists: 1650-1800*, Vol.1, edited by D. D. Raphael, Oxford: Clarendon Press, 1969 (邦訳)フランシス・ハチスン『美と徳の觀念の起源』山田英彦訳、玉川大学出版部、1983年。本文中での引用・参照に際しては、IBVと略記して、Raphael(1969)のページ数を記す。

は、私的利害とは無関係に他者の幸福を追求しようとする善意のみである。我々は道德感覚によって、行為の動機が善意であるか否かを識別するとともに、善意に対しては是認の快を、それ以外の動機に対しては否認の不快をそれぞれ感じるのである。さらに、この是認と否認の道德感情は、行為者に対する愛や憎しみをも引き起こす(IBV, pp.270-273)。

ハチスンによれば、道德感覚は、「観察された行為から、当の行為が我々自身に及ぼす利益あるいは損害に関するいかなる評価にも先立って、称賛または非難の単純観念を受け取る我々の心の決定」(IBV, p.269)、と定義される。ハチスは、道德的善悪の識別、是認と否認の道德感情、行為者への愛と憎しみ、これら全てを道德感覚の働きとして説明する。たしかにハチスンの道德感覚理論はロックの認識論に依拠したものであるが、最終的には道德感覚が人間本性の所与と見なされ、このような人間本性の設計者として「自然の制作者」(ibid.)や「善意の神」(IBV, p.299)という概念が持ち込まれている。

上で確認したハチスンの主張から、人間本性の所与としての道德感覚、自然の制作者という発想を除外しつつ、他者との感情的な交流の次元で道德感情の起源を解明したのが、ヒュームとスミスの道德理論である。ヒュームとスミスは、他者の意見や感情が我々にどのような影響を及ぼすかという見地から道德的規範の成立を分析しており、他者との感情の交流を可能ならしめる原理として「共感」概念を導入する。

本稿の目的は、ヒュームとスミスの共感論の分析を通じて、感情主義の理論的發展を明らかにすることにある。そのために、まず(1)ヒュームの共感論を道德的評価との関連で分析し、つづいて(2)スミスの共感論についても同様の分析を行な

うとともに、その独自性を明らかにする。そして、(3)ヒュームとスミスは共感論を活用することによって、ハチスンの道德感覚理論をどのような点で発展させているのかを検討する。

## 1. ヒュームの道德哲学における共感

ここでは、まず(1)ヒュームの理性主義批判と感情主義の立場を確認し、つづいて(2)共感と道德的評価がどのような関係にあるのかを分析する。

### 1.1 理性主義批判から感情主義へ

ヒュームは『人間本性論<sup>3</sup>』第三卷、第一部、第一節「道德的區別は理性からは生じない」と、第二節「道德的區別は道德感覚から生じる」において、彼自身の情念論と行為論に基づいて理性主義を批判するとともに、感情主義の立場を鮮明にしている。まず、ヒュームによれば、経験から明らかのように道德的評価は行為に影響するが、理性それだけでは行為に影響しえない。なぜなら、行為の動機になりうるのは「欲求(desire)」や「情念(passion)」だけであり、理性は行為に向かう衝撃を与えられないからである。理性の機能は、観念の関係についての論理的推論と事実に関する因果的または経験的推論に限られる。我々が何らかの先行する欲求を持つ場合にのみ、欲求の対象や充足手段を提示することによって、理性的推論は行為に間接的に影響する(THN, pp.413-418)。これらのことに基づいて

---

<sup>3</sup> Hume, David (1739-1740) *A Treatise of Human Nature*, edited by L. A. Selby-Bigge, 2nd ed., Oxford: Clarendon Press, 1978 (邦訳)デイヴィッド・ヒューム『人性論』大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952年。本文中での引用・参照に際しては THN と略記してページ数を記す。訳文は島内によるものだが、大槻訳を適宜参照した。

ヒュームは、道徳的評価は理性によるものではない、と結論づける。

ヒュームの認識論では、心に生じる一切のものは「知覚(perception)」であり、これは「印象(impression)」と「観念(idea)」に分かたれる。観念とは、理性が形成する印象の写しである(THN, pp.470-471)。上で確認した理性主義批判によれば、道徳的区別は観念ではありえないので、何らかの印象に基づくことになる。ヒュームは、道徳的評価の対象が「性格」や「動機」などの心的性質であることに着目して、次のように述べる。

性格というものは、我々の特殊な利害に関わりなく一般的に考察されるときにのみ、それを道徳的に善い、または悪いと呼ばせる感情を引き起こす(THN, p.472)。

道徳的評価の中心にあるのは、我々が性格の一般的考察から獲得する快苦の印象、すなわち是認と否認の道徳感情である<sup>4</sup>。この道徳感情は、ヒュームの情念論においては、「穏やかな間接情念(calm indirect passion)」と見なされる<sup>5</sup>。間接情念とは、他者を対象とする「愛(love)」と「憎しみ(hatred)」、自己を対象とする「自尊(pride)」と「自卑(humility)」のことである。道徳感情を間接情念の一種とする

---

<sup>4</sup> ヒュームにおける道徳的評価と道徳感情との関係については、解釈の分かれるところである。たとえば、(1)道徳的評価は行為者の心的性質に関する記述(description)である、(2)道徳的評価は観察者の持つ道徳感情および賛否の態度の表明(expression)である、という現代のメタ倫理学では対極にある記述主義と非記述主義の両方のヒューム解釈が可能である。これらの解釈については、Harrison(1976) pp.110-127、Mackie(1980) pp.73-75 を参照。

<sup>5</sup> 情念論との関係でヒュームの道徳論を分析したアーダルの研究以降は、この解釈は標準的なものになりつつある。この解釈の詳細については、Árdal(1966) pp.109-148、神野(1996) pp.77-87 を参照。

解釈の当否を詳細に論じることは本稿の目的ではないから、ここでは、この解釈の根拠になると思われるヒュームの議論を三つだけ挙げておきたい。まず、(1)徳や悪徳の印象を引き起こすのは自己または他者の心のうちに存する性質であって、これらの性質は快苦を生じさせるから、同時に四つの間接情念のいずれかを引き起こす(THN, p.473)、とヒューム自身が述べている。また、(2)道徳感情が非常に穏やかで静かに働くために、それはつねに理性と混同されてきた(THN, p.470)、(3)是認と否認の道徳感情は「淡くて気付かれない愛や憎しみ」(THN, p.614)に他ならない、などというヒュームの論述も道徳感情を穏やかな間接情念とする解釈を裏付けている。以上でヒュームの理性主義批判と感情主義の立場が明らかにされたので、道徳的評価と共感の関係を検討していこう。

## 1.2 ヒュームにおける道徳的評価と共感

道徳的評価が性格の一般的考察であるとして、我々は評価対象となる他者の性格や動機などの心的性質をどのようにして把握するのか。この問題に答えるのが、ヒュームの共感論である。ヒュームが共感概念を導入したのは、第二巻、第一部、第十一節「名声愛について(Of the love of fame)」においてである。ここでヒュームは、他者の意見や感情が自尊と自卑の間接情念の二次的な原因であることを論じており、我々が他者の意見や感情を受け取る「傾向性(propensity)」(THN, p.316)として、共感概念を導入している。また、ヒュームは、共感を「感情伝達の原理」(THN, p.427)とも表現しており、この感情伝達には、(1)「非認知的共感」、(2)「認

知的共感」という二つの種類がある<sup>6</sup>。

(1)まず、ヒュームによれば、人間の心はその働きが類似しており、お互いの情念を鏡のように反射しあう。そのために、ある人物の情念が即座に別の人物に伝わりることがありうる(THN, pp.575-576)。このように他者の状況に対する認識を介さずに成立する非認知的共感は「情動感染(emotional infection)」と呼ばれるものであり(Mercer 1972 pp.12-14)、人間だけではなくて動物の間にも見られる(THN, p.398)。たとえば、ある子供が泣いているのを見て、別の子供が泣き出すという事例が情動感染に該当する。しかし、次の二つの理由から、道徳感情は情動感染という非認知的共感には基づきえないように思われる。第一に、情動感染は自然発生的な心理現象であり、我々はその働きを制御しえない。後に見るようにヒュームは、共感原理の偏りを補整する「一般的観点(general point of view)」を導入しており、道徳感情が情動感染に基づくのであれば、そもそも共感の補整など論じる余地はないのである。第二に、喜びや悲しみなどの特定の感情とは異なり、性格というもの是非常に複雑な心的状態であるから、他者の性格に対しても情動感染が成り立つとは考えられない。

(2)ヒュームは感情伝達の複雑な形態を説明する際に共感原理を「観念の印象への転換」と定義する(THN, p.427)。ここでの共感原理は、他者の状況認識を含んだ認知的共感に他ならず、ヒュームはこれを「因果推理(causal reasoning)」の問題として捉えており、次のような説明を行なう。

私がある人物の声や身振りのうちに情念の結果を見ると、私の心はた

---

<sup>6</sup> ヒュームの共感論の分析として、Mercer(1972) pp.30-44 を参照。

だちにこの結果から原因に移って、情念のたいへん鮮明な観念を形成し、この観念はすぐに情念そのものに転換される。同様に、私がある情動の原因を知覚するならば、私の心はその結果に運ばれて、類似の情動によって動かされる。…(中略)…他者のいかなる情念も、心に直接に現われることはない。我々は、他者の情念の原因または結果を感知するのみである。我々は、これら[=情念の原因あるいは結果]から情念を推理する(THN, p.576 下線は原文イタリック)。

我々は他者の情念を直接的に経験しえないので、まずは情念の原因にあたる状況と、情念の結果として生じる外的行動を認識する。情念の原因および結果からの推論を通じて、他者の情念についての観念を我々は形成する(THN, pp.575-576)。ヒュームの認識論において、観念は、活気や勢いを欠いた印象の写しとされているが、それでは他者の感情の観念はどのような仕方で活気と勢いを獲得して印象に転じるのか。ヒュームによれば、「自己」の印象は我々につねに近接するものであり(THN, p.327)、この印象の活気や勢いが添付されることによって、他者の感情の観念はもとの印象、すなわち他者が感じているのと同様の情念に転換される。

さらにヒュームは認知的共感の中に「制限された(limited)共感」と「拡大的な(extensive)共感」の区別を設けており(THN, p.387)、少なくとも一箇所では、道徳感情が拡大的な共感に基づくと明言している(THN, p.586)。制限された共感とは、他者の現在の状況に対応する情念を獲得することである。これに対して、拡大的な共感とは、過去や将来などを含めて他者のあらゆる状況に対応する情念を獲得することであり、他者の現在の状況が我々に強力に作用する場合に拡大的な共感



は成立する。ヒュームは二つの共感の区別に関して次のような例を挙げる。たとえば、貧しい人物に対する制限された共感、その人物の現在の苦しみに共感することから始まり、最終的にはその人物への軽蔑を生じさせる。これとは反対に、我々が貧しい人物の状況を実感しうるならば、その人物の現在の苦しみに対する共感から哀れみや愛情が生じる(THN, pp.385-386)。道徳感情の基礎にあるのは、他者の状況を十分に認識することによって成立する拡大的な共感である。

上で確認した共感についてのヒュームの叙述からは、我々が道徳的評価の対象をどのように把握しているのかが明らかになるだろう。道徳的評価の対象は、厳密にいうならば、他者の性格や動機ではなくて、我々が形成したこれらの心的性質の観念である。我々は他者の行為を観察することから、行為を引き起こした原因を推理する。我々は行為に関する因果的知識として他者の性格や動機の観念を形成する<sup>7</sup>。それゆえ、道徳的区別は、対象のうちにではなく、我々の胸中に存するのである(THN, pp.468-469)。以上でヒュームの共感論の概略が明らかにされたから、道徳的評価と共感との関係を詳しく見ていこう。

共感原理の働きは対象との近接、類似などの関係に依存しており、そこには偏りが含まれる。そうすると、道徳的評価は概ね整合的なものであるから、状況に応じて変動する共感には基づきえない、という批判がなされよう。ヒュームは自説に対するこのような批判を想定し、それに応じるために「一般的観点」を導入する(THN, p.591)。

もし我々が各々の特殊な観点に現われるがままの性格や人格を考察す

---

<sup>7</sup> 性格の観念が因果的に構成されることに関しては、McIntyre(1990) pp.195-197 を参照。

るならば、合理的な言葉で語り合うことはできない。それゆえ、このような絶えざる矛盾(contradiction)を防ぎ、事物に関するもっと安定的な(stable)判断に到達するため、我々はある不動の一般的観点(steady and general point of view)を定める。そして、現在の状況がどのようなものであれ、我々は思考に際してつねに自らをこの観点におく(THN, pp.581-582 下線は原文イタリック)。

道徳的評価を性格の一般的考察とすることでヒュームは、この評価が自己利害とは無関係に行なわれることを明確にしているが、それだけでは評価の整合性を確保しえない。なぜなら、我々のおかれた状況の変化、たとえば時間、場所、心理状態などの変化が道徳的評価に影響しうるからである。我々が自分の特殊な観点を離れない限り、道徳的評価は観察者の違いに応じて、あるいは一観察者の状況の変化に応じて異なるものとなるだろう。こうした観察者の特殊な状況から独立の一般的観点をヒュームは次のように特徴づける。我々は自身の「現在の状況を看過する」(THN, p.582)ために「共通の観点」(THN, p.591)を採用し、この観点から「全ての観察者に同様に現われる」(ibid.)事情のみを考慮して道徳的評価を行なう。その事情とは、評価対象者と関係者の利害や快苦である。このようにヒュームにおける一般的観点は、評価に際して考慮すべき範囲および事情を限定するために、また、道徳に関する合理的な対話を可能にするために、我々が共通に採用するものである。

ここまでの考察をふまえて、道徳的評価に関するヒュームの主張を再確認しておこう。道徳的評価の対象は、行為の原因として因果的に構成される他者の心的

性質の観念である。我々はこれらの心的性質に基づく行為が評価対象者とその関係者に及ぼす影響に対して一般的観点から共感することを通じて、是認と否認の道徳感情を獲得する。

## 2. スミスの道徳哲学における共感

ここではスミスの道徳理論を概観するために、まず(1)共感論を分析し、つづいて(2)道徳的評価と共感の関係を考察する。また、スミスはヒュームの情念論および道徳論から多大な影響を受けているので、両者の議論を比較検討することによりスミスの独自性を明らかにしておきたい。

### 2.1 スミスの共感論

『道徳感情論<sup>8</sup>』の冒頭でスミスは、利己的人間でさえ他者と感情を分かち合うことに注目する。我々が他者と共有する感情は「同類感情(fellow-feeling)」と呼ばれるものである。ヒュームと同様にスミスは、我々が他者の心的状態を直接的には経験しえないことを認めた上で感情共有の過程を次のように説明する。

我々は、想像力によって自分自身を彼[=他者]の状況において、我々自身も彼と同じ苦しみを受けていると想像する。我々は、いわば彼の身体に入り込み、ある程度まで彼と同一の人物になる。そして、我々は、彼

---

<sup>8</sup> Smith, Adam (1759) *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A.L. MacFie, Oxford: Oxford University Press, 1976 (邦訳)アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳、筑摩書房、1973年。本文中での引用・参照に際しては、TMSと略記して、グラスゴウ版の部、篇、章、段落番号、ページ数の順に記す。訳文は島内によるものである。

の感受作用(sensation)について何らかの観念を形成し、程度は弱いけれども彼の感情に全く似ていなくもない何かを感じさえする(TMS, I . i .1.2, p.9)。

共感とは、「想像上の立場交換(imaginary change of situation)」の結果として実現する感情の一致や共有のことである。ただし、多くの研究者の指摘にもあるように、スミスはこの概念を多義的に用いる<sup>9</sup>。スミスにおける共感概念の用法を整理したクヌート・ホーコンセンによれば、この概念をスミスは、(a)他者の立場に想像上で移動すること、(b)この移動の結果として生じる感情、(c)感情の一致と共有、(d)一致と共有の結果として生じる快い感情、以上の四つの意味で用いている(Haakonssen 1981 p.51)。スミスがこれら四つを概念的に区別する際には、(a)に「想像上の立場交換」、(b)に「共感的感情(sympathetic feeling)」、(d)に「是認(approve)」という表現をあてる。以下ではこれらの表現を区別することにして、共感という表現は感情の一致や共有の意味で用いていく。

つづいて、スミスの共感論の独自性について検討しておこう<sup>10</sup>。その独自性とは、(1)共感の源泉としての想像上の立場交換、(2)立場交換を動機づける「相互的共感の快」または「共感する欲求」への注目、(3)相互的感情調整の結果としての共感、以上の三つである。

(1)まずヒュームと同様にスミスは、非認知的共感の可能性を認める。しかし、スミスによれば、情動感染は全ての情念に対して成立しうる現象ではないし、十

---

<sup>9</sup> たとえば、Campbell(1971) p.94にも同様の指摘がある。

<sup>10</sup> ヒュームとスミスの共感概念の共通点および相違点に関しては、Mercer(1972)、田中(1973)、新村(1994)を参照。

全な共感とは見なしえない。たとえば、他者が激しい怒りを感じている場合、我々はただちにこの怒りに共感するというよりはむしろ、怒りの対象になる人物の身の上を心配する。我々がこの怒りに共感しうるのは、怒りの原因が適切であることが判明したのちにある(TMS, I . i .1.6, p.11)。かくしてスミスは、「共感とは情念を見ることからよりもむしろ、情念を引き起こした状況を見ることから生じる」(TMS, I . i .1.10, p.12)と結論づけて、想像上の立場交換を共感の基礎に据える。

立場交換という発想は、ヒュームにおいてすでに示唆されている。自己に対する道徳的評価を説明した際にヒュームは、この評価が他人から見えるであろう我々自身の姿に基づくと述べることによって(THN, p.589)、道徳的評価の成立には他者の立場や観点の取得という契機が含まれることを示唆している<sup>11</sup>。ただし、立場交換を示唆するヒュームの議論は、道徳的評価を説明する文脈に限られている。ヒュームは共感原理に情動感染、推論と想像力とによる情念の再現という二種類の説明を行なっているが、この説明の中には立場交換という発想は含まれていない。スミスの共感論の独自性は、共感の成立には立場交換が不可欠であることを明確にした点に存する。

(2)スミスは、共感の成否が快苦をもたらすことに着目する。我々は、他者への共感と、他者からの共感の両方に喜びを感じる(TMS, I . i .2.1, pp.13-14)。たとえば、AさんがBさんの悲しみに共感すると想定しよう。この場合、Aさんは自分がBさんの悲しみを共有しえたことに「他者理解の快」とでもいべき満足を感じる。また、BさんはAさんに共感してもらったことによって、自分の悲しみが

---

<sup>11</sup> 他者の視点の内面化という論点に関しては、柘植(1998) pp.186-189、Blackburn(1998) pp.200-212を参照。

いくらか軽減されたように感じるだろう。この例とは反対に、他者の気持ちを理解しえないことや、他者から理解されないことに、我々は不満を感じる。さらに、スミスによれば、他者との交際や社交の喜びもまた、感情や意見の共有すなわち共感に基づく(TMS, VII. iv. 28 p.337)。それゆえ、我々は他者の感情を理解し、それを実際に感じることを欲求する。我々に他者との立場交換を促すのは、「共感する欲求」なのである。

(3)相互的共感の快に着目したスミスは、共感それ自体が相互的に達成されることにも論及している。そもそもスミスの共感論において、観察者の共感的感情とは、行為者の感情に「全く似ていなくはない何か」である。立場交換が瞬間的な作用にすぎないことを観察者がつねに意識するために、共感的感情は行為者の感情と同水準にまでは高揚しない。にもかかわらず、観察者と行為者はともに感情の一致を欲求する。共感を達成するためには、行為者の側には感情の抑制が、観察者の側には共感的感情の高揚がそれぞれ要求される。スミスによれば、行為者は観察者の立場に想像上で移動し、この立場から自分の状況を受け止める際に生じるであろう感情的反応を基準に自身のもとの感情を抑制する。また、観察者は共感的感情を高揚させるために、行為者の事情を可能な限り詳細に検討してしかるべきである(TMS, I . i .4.6-7, pp.21-22)。このような感情の調整を促すのは、相互的共感の快に他ならない。共感する欲求は、単なる立場交換を動機づけるのみならず、より正確な立場交換をも動機づけるのである。以上でスミスの共感論の概略とその独自性が明らかにされたので、つづいて共感と道徳的評価との関係を検討していこう。

## 2.2 スミスにおける道徳的評価と共感

スミスによれば、道徳的評価の対象は行為の動機であり、我々は動機を二側面から吟味する。第一に、我々は動機となる感情の原因すなわち行為者の状況との関連で、動機の「適正(propriety)」を評価する。第二に、我々は動機の結果として生じる行為との関連で行為の「功罪(merit/demerit)」を評価する。適正の評価は行為者への共感に、功績の評価は行為者と関係者への共感にそれぞれ基づく(TMS, I. i .3.5-7, p.18)。動機の適正を評価する場合、観察者は行為者と立場を交換し、共感的感情と行為の動機を比較する。共感の成否に応じて観察者に生じる快苦が、是認と否認の道徳感情である(TMS, I. i .3.1, p.16)。つぎに、行為の功罪を評価する場合、観察者は適正の評価を行なった上で、関係者と立場を交換する。適正な動機の行為が「感謝(gratitude)」を生じさせるならば、観察者は行為を是認する。反対に、不適正な動機の行為が「憤慨(resentment)」を生じさせるならば、観察者は行為を否認する(TMS, II. i .5, pp.74-76)<sup>12</sup>。

スミスによる道徳的評価の分析に対しては、ヒュームの場合と同様、次のような批判が行なわれよう。その批判とは、道徳的評価は整合的なものであるから状況に応じて変動する共感には基づきえない、というものである。この批判に対するスミスの応答を理解するためには、自己に対する道徳的評価や「良心」に関するスミスの議論を検討しなければならない<sup>13</sup>。スミスは『道徳感情論』第一部で

---

<sup>12</sup> 適正な動機の行為が関係者に憤慨を生じさせ、不適正な動機の行為が関係者に感謝を生じさせる場合には、関係者への共感が成り立ちにくいので、功罪がそれぞれ少なく評価される(TMS, I. i .2, pp.92-108)。

<sup>13</sup> スミスの良心論に関しては、各版ごとの異同を入念に検討した田中(1999a) pp.115-128、田中(1999b) pp.145-161 を参照。

他者に対する道徳的評価を分析し、第三部の冒頭で自己に対する道徳的評価の方法が他者を評価する場合と全く同じであると明言している。すなわち、スミスによれば、行為者は観察者の立場に移動して、そこでの共感の正否に基づいて自己評価を行なう(TMS, III.1.2, pp.109-110)。ところが、スミスは第一部の段階で道徳的評価の担い手たる観察者を「傍観者(bystander)」、「見知らぬ人(stranger)」などとも表現しており、行為者と関係者以外の大部分の人間は可能的には観察者でありうることを示唆している。それでは、我々は自己評価をどのような観察者の立場から行なうのか。

スミスは、「自愛(self-love)」の激しさが自己評価を歪めるとして、この歪みを対象との距離から視覚に生じる歪みと類比的に捉えている。同一の大きさの対象を異なる距離から観察すれば、近接する対象の方が大きく見える。これと同様、重要性が同程度であるとしても、我々は身近にある自己利害を他者の利害よりも優先してしまう。視覚の歪みを補整する際に、我々は二つの対象を同じ距離から観察すればどう見えるのかという思考実験を行なう。スミスによれば、自己評価の歪みも同様の仕方で補整される。つまり、道徳的評価に際しては、「公平な観察者(impartial spectator)」の観点を採用し、自己利害と他者の利害を等しい距離から比較しなければならない(TMS, III.3.2-4, pp.134-137, added 2nd ed.)。スミスは、公平な観察者について次のように述べる。。

このような[=対立する]利害を適切(proper)に比較するためには、立場を交換しなければならない。我々はこれらの利害を自身の立場や他者の立場から考察するのではないし、また、自身の視点や他者の視点から考察



するのでもない。我々は[我々と他者の]どちらに対しても特別な関係を持たず、我々の間で公平に判断しうる第三者の立場と視点から考察しなければならぬ(TMS, III.3.3, p.135, added 2nd ed.)。

公平な観察者とは、行為者と関係者のどちらに対しても特別な関係を持たない第三者のことであり、この観察者の観点においてのみ、全ての関係者の利害を適切に重みづけた判断が可能になる。スミスは公平な観察者の概念を導入した後に、自己評価に固有の問題を考察していく。それは、(a)公平な観察者の立場からの自己評価と、(b)この観察者の立場から他者が行なう評価が食い違う場合、どちらがより正確な評価でありうるか、という問題である。ひとまず、自己評価に際して公平な観察者の観点を採用するならば、(a)の方が正確な評価になる、とスミスは考えている。なぜならば、(a)と(b)はどちらも全ての関係者の利害を適切に重み付けた評価であるが、(a)は行為の遂行状況、とりわけ動機や性格などに関して十分な情報に基づくからである。つまり、行為者のうちに「想定された公平で事情に通じた(well-informed)観察者」(TMS, III.2.32, p.130 added 6th ed.)の方が、実在する第三者としての公平な観察者よりも正確な評価を行ないうる。スミスは、自己評価は十分な情報に基づくとすることにより、それが他者の評価からは相対的に独立しうること、すなわち良心の自律性の論証を試みたのである。

スミスの良心論の詳細な分析はさておくとして、観察者が事情に通じているという論点を検討しよう。この論点は、良心の自律性論証のためにのみ、スミス本来の主張とは無関係に導入されたのではない。むしろ、この論点は、共感論の三つ目の独自性、すなわち相互的感情調整のうちに含まれている。すでに確認した

ように、共感を実現するためには観察者は行為者の事情を詳細に検討してしかるべきである、とスミスは述べる。道徳的評価に際して、観察者が事情に通じていなければならないのは、そもそもこの評価の基礎となる共感が行為者の事情にある程度まで通じた観察者によってのみ可能だからである。我々は共感する欲求に促されて正確な立場交換に努めるので、道徳的評価には行為の遂行状況に関する情報が十分に取り入れられることになる。

道徳的評価に関するヒュームとスミスの説明を比較することで、スミスの独自性を見ておこう。スミスは道徳的評価を適正と功績の二つに分かつが、適正という視点はスミス独自のものである。というのもヒュームは、「性格および情念の単なる見かけや外観」と「[性格および情念が持つ]人類および特定の人物の幸福への傾向性」との両方が道徳的評価の源泉にあると述べた上で、後者をより重要なものとしているからである(THN, pp.589-590)。つまり、ヒュームは徳を自己または他者にとって有益または快的な性質と規定することからも明らかなように、心的性質がいかなる影響を及ぼすのかを道徳的評価の基準にする(THN, p.590-591)。これに対してスミスは、その都度の状況における情念の適切さ、すなわち情念が観察者によって共感されるか否かを道徳的評価の基礎とする。こうしたことから、特定の行動を恒常的に引き起こしうる持続的原理としての性格の善し悪しをヒュームが問題にしているのに対して、スミスは個別の状況における情念の程度を問題にするという違いが浮かび上がる。別の言い方をすると、ヒュームは有徳な性格の涵養に、スミスは状況ごとの情念の抑制にそれぞれ議論の重点をおくのである。

### 3. 感情主義の発展：ハチスンからヒューム、スミスへ

ここでは、ヒュームとスミスの共感論がハチスンの道徳感覚理論を三つの点で発展させていることを明らかにしたい。ハチスンの道徳感覚理論には、(1)利己心の否定的な扱い、(2)経験論と神学との併存、(3)道徳感情の動機づけの力に関する不十分な説明、以上の三つの問題点がある。ヒュームとスミスは、共感概念を用いることで、これらの問題点を回避している。

(1)ハチスは善意のみを有徳な動機と見なし、利己心には一切の道徳的価値を見出さない。それゆえ、スミスの批判にあるように、利己心を適切に方向づけることで成立する徳、すなわち「処世の思慮(prudence)」に代表される「下級の徳」をハチスは説明しえない(TMS, VII. ii .3.15 p.304)。しかし、これらの徳は市場経済を中心とする近代社会の原動力とも見なされうるから、是認されてしかるべきである。ヒュームとスミスは、これらの徳を共感論に基づいて説明することができる。まず、ヒュームにおいては、処世の思慮は勤勉、節儉などとともに、当人にとって有益な性質と見なされるが、我々はこの有益性に共感することにより、これらの性質を徳として是認する。つづいて、スミスにおいては、どのような感情であろうとも観察者の共感しうる程度のものである限りは是認されるので、適切な程度にまで制御された利己心は是認の対象となる。ヒュームとスミスは共感論に基づいて、利己心を道徳的に中立のものとし、一定の条件を満たしていれば利己心が徳になりうることを論じたのである。

(2)ハチスンにおいては、動機の識別と行為の動機づけという二つの機能を持つ道徳感覚が、人間本性の所与と見なされる。しかも、ハチスは、人間本性のこのような構成が「善意の神」によるものだ、とさえ論じている。もちろん十八世

紀にはまだ進化論的発想がないから、人間本性を分析する際に設計者としての神に言及するのは無理からぬことである。しかし、ハチスンとほぼ同時代に活躍したヒュームとスミスにおいて、神の概念を用いずに道徳を人間本性にのみ基礎づける試みがなされていることは、注目に値する。たしかにヒュームは「道徳感覚」という言葉を用いているが、この言葉は実体的な感覚能力ではなくて、道徳感情の生じる機制を指示するものである。しかも、ヒュームは道徳感情を想像力や推論の所産として説明する。スミスにおいても同様、道徳感情は立場交換という想像力の働きによって説明されている。このようにヒュームとスミスは、道徳的能力を我々が実際に持つ心的能力に基づいて分析するというある種の還元主義的なアプローチを試みており、ハチスンよりも経験論の立場を前進させている。

(3)感情主義の理論的長所は、道徳的評価と行為の動機づけとの関わりを視野に入れている点にある。たしかにハチスンも、道徳感情を評価対象者への愛と憎しみに結び付けている。しかし、この結びつきを十分に説明しておらず、道徳感情が必然的に愛や憎しみを生むと述べているだけである。これに対してヒュームとスミスにおいては、道徳感情の動機づけの力について、ハチスンよりも実質的な議論がなされている。両者の議論を理解するためにはまず、その前提となるヒュームの情念論を詳細に検討しなければならないので、ここでは紙幅の都合上、ヒュームとスミスによる議論の道筋を概観するにとどめたい。

すでに確認したようにヒュームにおいて道徳感情は穏やかな間接情念の一種である。ヒュームは愛と憎しみの間接情念を次のように特徴づける。これらの情念はそれ自身で完結するものではなく、「善意」と「怒り(anger)」がこれらの情念に継起する。さらにヒュームは、善意と怒りを欲求と同一視する。すなわち、善意

とは他者の幸福に対する欲求であり、怒りとは他者の不幸に対する欲求に他ならない(THN, p.367)。このようにヒュームにおいては、道德感情の動機づけの力がこの感情に付随する欲求に基づく、という議論が提示されている。

またヒュームは、「義務感(sense of duty)」から徳が遂行されうることを正義の徳を論じた際にとりわけ強調している(THN, p.518)。義務感による動機づけについてシャーロット・ブラウンは、名声愛に関するヒュームの議論を手掛かりに次のような解釈を行なう(Brown 1990 pp.29-31)。我々は自尊の原因となる他者からの評価や称賛に対して強い関心を抱いており、他者が我々に対して持つこれらの感情を共感原理の働きによって受け取る。他者からの称賛や非難が共感原理によって内面化されると、我々は次第に他者がするような仕方で自己を評価し始める。そして、共感を媒介とした自己吟味が他者から愛されることへの欲求を我々に生じさせる。この欲求が強力なものであるからこそ、我々は自身の性格のうちに有徳な動機が欠けている場合には、「この理由から自身を憎んで、実践を通じて有徳な原理を獲得するために、動機なしに義務感から行為する」(THN, p.479)。以上のようなブラウンの解釈が正しいのであれば、ヒュームにおいては、人間本性に根差した称賛願望が社会的交流や自己吟味などの反省的な過程を通じて道德的欲求に転じるという議論が提示されたことになる<sup>14</sup>。実はこの議論は、ブラウンも指摘しているように、良心は内面化された他者の視点であるというスミスの主張と類似している(Brown 1990 p.30)。

つぎに、スミス自身は道德感情の動機づけの力に関して明確な議論を行なっていないが、彼の共感論に基づく次のような説明が可能であると思われる。たと

えば、「困っている人を助けるのは善いことである」という道徳的評価を我々が行なう場合、我々は二つの感情を抱くことになる。一つは、行為者への是認感情であり、もう一つは、行為の動機に対する共感である。動機に対する共感は行為者との立場交換から生じたものであり、困っている人の身近にいる行為者の状況を想定した上で、その人を助けようという動機を我々は行為者と共有している。つまり、スミスにおいては、行為の動機に対する共感が観察者に道徳的行為を動機づける、という独自の発想が示唆されている。

さらに、スミスは、「称賛(raise)への愛」と「称賛に値すること(raise-worthiness)への愛」の区別に着目して、良心の行為指導的な役割について論じている(TMS, III.2, pp.113-122)。スミスによれば、人間は単なる第三者から称賛されることを欲求するだけでなく、彼らが行為の遂行状況を熟知したとしてもなお彼らから称賛されることをも欲求する。我々は自らの在り方が、実在する公平な観察者から是認されることのみならず、我々の心のうちに「想定された公平で事情に通じた観察者」、すなわち良心による是認に値することを望むのである。スミスは良心について論じる際に、称賛願望が自己吟味を通じて道徳的欲求に転じるというかたちで、道徳感情の動機づけの力を説明したのである。

#### 4. むすび

ここまでの考察から、ヒュームとスミスの共感論がハチスンの道徳感覚理論をそれぞれの仕方で改良していることが明らかになった。しかしながら、この考察にはまだ不十分な点が含まれていることも認めておかねばならない。感情主義の

---

<sup>14</sup> ヒュームの道徳哲学における「反省」の重要性を強調するものとして、Baier(1991)がある。

道徳哲学あるいはより広範にスコットランド啓蒙思想を検討する際には、(1)富と徳、(2)道徳(理論)の世俗化、(3)道徳的思考と(自然)法学的思考との連環および分離、という論点に着目する必要がある。本稿では、ヒュームとスミスにおける利己心の道徳的中立化と経験論の徹底とを確認することにより、(1)と(2)に関しては一定の考察を試みたが、(3)について論じることはできなかった。この道徳的思考と法学的思考との連環および分離という問題は、ホッブズ流の利己主義からハチスン、ヒューム、スミスの感情主義を経由して功利主義にいたるイギリス道徳哲学史において、いわば執拗低音のように絶えず問われつづけている。この問題に関しては、当時の自然法学との関係に留意しつつ、ヒュームとスミスの正義論を検討する必要があるだろう。

こうした検討課題が残されているにせよ、ここまでの考察を通じて、我々がヒュームとスミスから継承すべき発想のいくつかが明らかにされたであろう。その第一は、道徳認識論の自然化という発想である。すなわち、我々は人間本性に関する科学的知見を十分に活用しうるのだから、直覚や道徳感覚などの未知の能力を想定せず、人間が実際に持つ心的能力に基づいて、道徳的認識の成立を説明しなければならない。第二に、他者への関心の重要性である。現代では多くの道徳理論家が、立場の違いにもかかわらず、利己的人間を想定して議論を構築している。しかし、このような人間理解はあまりにも貧弱なものではないだろうか。我々が他者の反応を考慮しつつ行為することと、共感という心的能力と他者への関心が密接な関係にあることは、人間本性に関する事実として道徳理論の基礎に据えられるべきである。他者に対して共感的な諸個人からなる市場社会に文明の進展を託したヒュームとスミスの道徳哲学は、市場のグローバル化が喧伝される現代

においてこそ、新たな規範的考察の出発点となるであろう。

## 参考文献

Hume, David (1739-1740) *A Treatise of Human Nature*, edited by L. A. Selby-Bigge, 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1978 [abbr. THN] (邦訳)デイヴィッド・ヒューム『人性論』大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952年

Hutcheson, Francis (1725) *An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue*, in *British Moralists: 1650-1800*, edited by D. D. Raphael, Oxford: Clarendon Press, 1969 [abbr. IBV] (邦訳)フランシス・ハチスン『美と徳の観念の起源』山田英彦訳、玉川大学出版部、1983年

Smith, Adam (1759) *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A.L. MacFie, Oxford: Oxford University Press, 1976 [abbr. TMS] (邦訳)アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳、筑摩書房、1973年

Árdal, Pall S. (1966) *Passion and Value in Hume's Treatise*, Edinburgh: Edinburgh University Press

Baier, Annette C.(1991) *A Progress of Sentiments: Reflections on Hume's Treatise*, Cambridge Mass.: Harvard University Press

Blackburn, Simon (1998) *Ruling Passions: A Theory of Practical Reasoning*, Oxford: Clarendon Press

Brown, Charlotte (1994) 'From Spectator to Agent: Hume's Theory of Obligation,' in *Hume Studies*, Vol.20, No.1, pp.19-35

Campbell, Tom D. (1971) *Adam Smith's Science of Morals*, London: Allen and Unwin

Haakonssen, Knud (1981) *The Science of A Legislator: The Natural Jurisprudence of*



*David Hume and Adam Smith*, Cambridge: Cambridge University Press (邦訳)クヌート・ホーコンセン『立法者の科学：デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学』永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳、ミネルヴァ書房、2001年

Harrison, Jonathan (1976) *Hume's Moral Epistemology*, Oxford: Clarendon Press

Mackie, J. L. (1980) *Hume's Moral Theory*, London: Routledge

McIntyre, Jane L. (1990) 'Character: A Humean Account,' in *History of Philosophy Quarterly*, Vol.7, No.2, pp.193-206

Mercer, Philip (1972) *Sympathy and Ethics: A Study of the Relationship between Sympathy and Morality with Special Reference to Hume's Treatise*, Oxford: Clarendon Press

Raphael, David D.(1969) *British Moralists: 1650-1800*, Vol.1, Oxford: Clarendon Press

神野慧一郎(1996)『モラル・サイエンスの形成——ヒューム哲学の基本構造——』名古屋大学出版会

田中正司(1973)「同感論におけるヒュームとスミス」、『思想』第593号、岩波書店、pp.78-93、所収

田中正司(1999a)『アダム・スミスの倫理学(上)——『道徳感情論』と『国富論』——』御茶の水書房

——(1999b)『アダム・スミスの倫理学(下)——『道徳感情論』と『国富論』——』御茶の水書房

栢植尚則(1998)「「観察者」から「行為者」へ——ハチスン、ヒューム、アダム・スミス——」、『北海学園大学経済論集』第46巻第2号、pp.183-193、所収

新村聡(1994)『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学——』御茶の水書房

(しまのうち あきふみ 博士後期課程 1 回生)